

萩博物館特別展

藤田伝三郎翁生誕 170 年記念

日本の近代を拓いた萩の産業人脈

藤田伝三郎とその時代



関西財界のリーダー藤田伝三郎を源流とする、久原房之助（伝三郎の甥）・田村市郎（伝三郎の甥）・鮎川義介（房之助の義兄）らの萩ゆかりの実業家たちは、明治維新以降、近代化の潮流の中で日本の産業を切り拓き、自動車・鉄道車両・金属・水産・観光など現在の日本を代表する企業の基礎を築きました。彼らの夢と情熱をかけた挑戦の軌跡を追います。

会期：平成 23 年 12 月 1 日(木)～平成 24 年 4 月 10 日(火)

後援：KRY 山口放送、tys テレビ山口、yab 山口朝日放送、萩ケーブルネットワーク株式会社

協賛：J X 日鉱日石金属株式会社、株式会社損害保険ジャパン、DOWA ホールディングス株式会社、日産自動車株式会社、日本水産株式会社、日立金属株式会社九州工場、株式会社日立製作所笠戸事業所、藤田観光株式会社（50 音順）

協力：秋田県小坂町、石見銀山資料館、大阪商工会議所、岡山県立興陽高等学校、岡山市第二藤田学区連合町内会、岡山市南区藤田地域センター、香雪之会、国立国会図書館憲政資料室、春光懇話会、日鉱記念館、日本女子大学成瀬記念館、藤田神社、藤田美術館、山口県文書館（50 音順）

主催：萩博物館

・藤田伝三郎と藤田組の創設

藤田伝三郎 天保 12 年～大正元年（1841～1912）



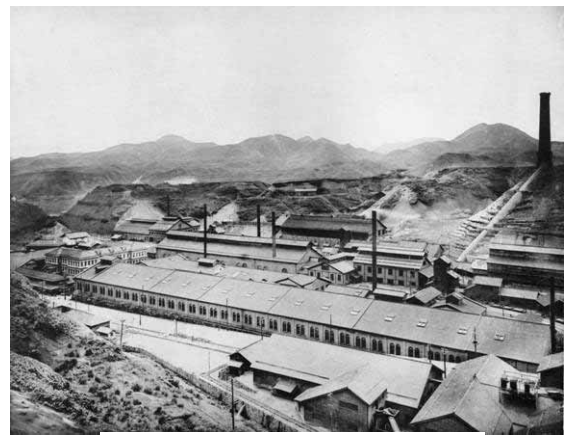
藤田伝三郎

（DOWA ホールディングス株式会社提供）

酒造家藤田半右衛門の 4 男として誕生。明治 2 年（1869）大阪に出て軍の御用達に従事、明治 14 年に兄藤田鹿太郎・久原庄三郎とともに藤田組を設立。京都・大津間鉄道建設や琵琶湖疎水工事を請け負い、小坂鉱山や大森鉱山を経営するとともに児島湾干拓などの事業を展開。大阪商法会議所の 2 代会頭に就任し、関西財界のリーダーとして活躍。秋田鉱山専門学校や日本女子大学校に資金援助し、郷里萩にも多額の寄付をした。

1 . 小坂鉱山の経営

明治 17 年（1884）藤田組は、秋田県小坂鉱山の払い下げを受けたが、銀鉱石（土鉱）減少と日清戦争後の不況、金本位制移行による銀価暴落は、鉱山経営の危機をもたらした。旧萩藩主毛利家からの金融援助で危機を切り抜け、自熔製錬という黒鉱製錬技術の開発によって銅山として再生、日本屈指の産銅量を誇った。平成 2 年（1990）鉱石採掘が終了したが、現在は 20 種類もの有価金属を製品化する複合リサイクル製錬所へ発展している。



小坂鉱山電錬場全景

（小坂町総合博物館郷土館蔵）

2 . 大森鉱山の復興

明治 20 年（1887）藤田組は、島根県大森鉱山（石見銀山）全鉱区を買収、操業を開始した。明治 30 年代に入って銅富鉱が発見されると、明治 34 年（1901）排水に改良が加えられ、発電所や選鉱場が完成した。鉱石を熔鉱炉で溶かして

金・銀を含む型銅をつくり、小坂鉱山に送った。大正 12 年(1923)採掘を休止、平成 18 年(2006)DOWA ホールディングス(藤田組の後身)は、鉱業権を島根県に譲与した。現在は世界遺産となっている。



大森鉱山清水谷精錬所
(上野治子氏蔵)

3 . 児島湾の干拓

明治 22 年(1889)藤田伝三郎に岡山県児島湾干拓の起工が許可されたが、治水・漁業等の面から干拓反対運動が激しくなり、9 年間 8 度にわたり延期された。明治 31 年(1898)藤田組に起工許可され、翌年干拓事業に着手した。干拓工事進行につれ、600 町歩余(595ha)に日本最初の直営機械化農場を開設、藤田組による農場経営が開始された。大正元年(1912)児島湾干拓第二区が竣工、興除村に編入した一部を除き藤田村が創設された。



藤田組が購入した米国製トラクター
(岡山県立興陽高等学校蔵)

4 . 藤田伝三郎をめぐる人々

明治 24 年(1891)藤田組は、旧萩藩士で初代外務大臣をつとめた井上馨の仲介により旧萩藩主毛利家より融資を受け、同年藤田伝三郎は井上とともに小坂鉱山を訪れた。明治 38 年(1905)兄の藤田鹿太郎家(嫡子小太郎)と久原庄三郎家(嫡子房之助)との分離の際も、井上の斡旋によって解決した。伝三郎には平太郎・徳次郎・彦三郎の 3 人の男子があり、長男の平太郎は伝三郎の跡を継ぎ、大正元年(1912)藤田組 2 代目社長に就任した。



藤田伝三郎一家
(藤田観光株式会社太閤園提供)

・久原房之助と久原鉱業の設立

久原房之助 明治2年～昭和40年（1869～1965）



久原房之助

（JX 日鉱日石金属株式会社提供）

久原庄三郎の4男として誕生。慶応義塾卒業、明治24年（1891）藤田組に入社、小坂鉱山に赴任し足尾・別子と並ぶ三大銅山として再生。明治38年に藤田組から独立、日立鉱山を創業し日本屈指の銅山に発展させた。大正元年（1912）久原鉱業を設立して事業を拡大したが、昭和3年（1928）義兄鮎川義介に事業を委ね、立憲政友会に入り衆議院議員に当選、田中義一内閣の逓信大臣に就任。昭和36年、萩市名誉市民第1号に推挙。

1．小坂鉱山時代

明治24年（1891）久原房之助は森村組（現、ノリタケカンパニーリミテド）を退社、藤田組に入社し、小坂鉱山に赴任した。明治30年、所長に就任、気鋭の技術陣を登用して、黒鉱（亜鉛を主体に金・銀・銅など種々の有用金属を含む硫化物）製錬法の開発に取り組んだ。その結果、硫黄分を燃焼させたエネルギーで鉱石を熔かし、銅を回収する自熔製錬という技術の開発に成功した。明治38年、藤田組の三家分離によって退社した。



小坂鉱山における久原房之助（前列左から3人目）
（小坂町総合博物館郷土館蔵）

2．日立鉱山の創業

明治38年（1905）久原房之助は茨城県赤沢銅山を買収、日立鉱山として開業した。機械化・近代化を推進し、日立鉱山の鉱石のみならず、他山から鉱石を買い入れて製錬する買鉱製錬を展開し、生産の拡大と価格の安定を目指した。大

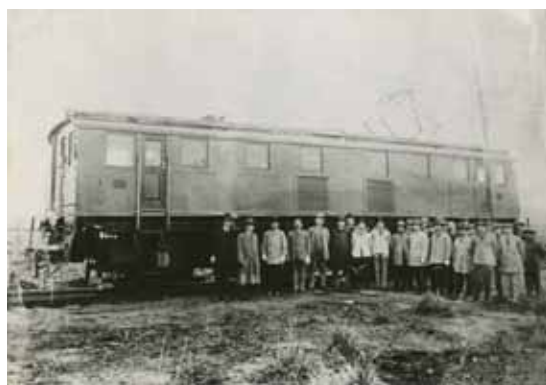
正元年（1912）久原鉱業所を株式会社に改組、大正6年には銅・金・銀ともに国内第1位の生産量に成長した。大正4年には煙害問題の解決を図り、当時世界一高い大煙突を完成させた。昭和56年（1981）閉山した。



創業時の第一煙突記念撮影
(JX日鉱日石金属株式会社提供)

3．日本汽船笠戸造船所の設立

大正4年（1915）久原房之助は、兄の田村市郎と日本汽船を設立し、大正6年山口県下松に日本汽船笠戸造船所を創業した。この年、房之助は下松大工業都市建設計画を発表し、造船・製鉄業の一大工業地帯を目指した。しかし、アメリカの鉄鋼輸出禁止策によって翌年計画を断念し、笠戸造船所は蒸気機関車など鉄道車両の製造に転換した。大正10年、日立製作所笠戸工場となり、現在は新幹線電車など最新鋭の鉄道車両などを製作している。



国産第1号電気機関車完成記念
(株式会社日立製作所笠戸事業所提供)

4．政治家への転身

昭和3年（1928）久原房之助は立憲政友会に入党、衆議員議員に初当選し、同郷の田中義一内閣の逓信大臣に就任した。同年、久原鉱業社長を辞任、義兄の鮎川義介に委ねた。その後、衆議員議員に連続4回当選、昭和14年には立憲政友会総裁に就任した。昭和30年、日中・日ソ国交回復国民会議会長に就任、中国・ソビエト連邦との友好関係構築に尽力した。昭和34年に山口県須佐町名誉町民、昭和36年に萩市名誉市民第1号に推挙された。



浴衣姿の久原房之助(右)と田中義一(左)
(山口県文書館蔵)

・ 鮎川義介と日産コンツェルンの構築

鮎川義介 明治 13 年～昭和 42 年（1880～1967）



鮎川義介

（日産自動車株式会社提供）

萩藩士鮎川弥八の長男として誕生。東京帝国大学工科大学卒業、明治 38 年（1905）渡米し鋳物製造会社で見習工として働き、帰国後、戸畑鋳物を設立。昭和 3 年（1928）義弟久原房之助の後を受け久原鋳業社長に就任、持株会社の日本産業に改組、日産自動車・日本鋳業・日立製作所・日本水産などを傘下に収め、日本最大のコンツェルンに成長させた。昭和 12 年、日本産業を満州国に移駐し満州重工業開発に改組、初代総裁に就任。

1 . 戸畑鋳物の創業

明治 40 年（1907）鮎川義介は井上馨の斡旋により鋳物会社設立を計画、明治 43 年、福岡県戸畑に戸畑鋳物を創業した。東洋における最初の可鍛鋳鉄の生産を開始、鉄管の継手は欧米に輸出され、可鍛鋳鉄の国産化と輸出を実現した。昭和 3 年（1928）ごろから自動車部品の製造を始め、昭和 6 年にはダット自動車製造を戸畑鋳物の傘下に収め、ダットサン 1 号車が完成した。昭和 55 年（1980）戸畑工場は、日立金属九州工場として福岡県苅田町に移転した。



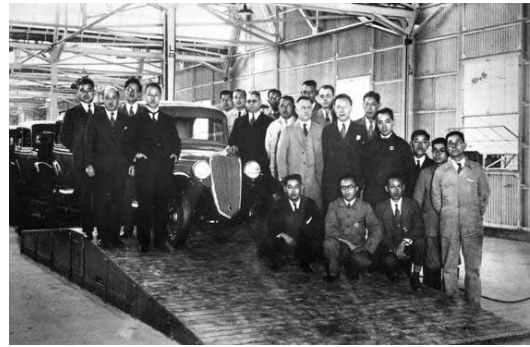
創業時の戸畑鋳物工場

（『創立廿五周年記念戸畑鋳物株式会社要覧』）

2 . 日産自動車の設立

昭和 8 年（1933）鮎川義介は戸畑鋳物に自動車部を創設、ダット自動車製造の大阪工場を買収した。さらに横浜市から新子安海岸埋立地 2 万余坪を買収、自動車製造会社を横浜市に設立した。翌昭和 9 年に社名を日産自動車と改称、昭

和 10 年に大量生産方式による一貫生産車第 1 号のダットサンセダが、横浜工場のコンベアラインからオフラインし、2 年間で累計 1 万台の量産を達成した。



横浜工場生産第 1 号車オフライン式
(日産自動車株式会社提供)

3 . 日本産業の創設と満州開発

昭和 3 年 (1928) 鮎川義介は久原房之助から引き継いだ久原鋳業を改組、日本産業を創設し公開持株会社として再生した。日本産業は鋳業・工業・自動車工業・化学・水産などの各部門に直系会社 18 社を有するコンツェルンを形成し、昭和 12 年には三井、三菱に次ぐ企業集団に成長した。同年日本産業は満州に移駐、満州重工業開発と改称、義介は総裁に就任したが、軍が経営に干渉を始めると見切りをつけ、昭和 17 年満州からの撤退を開始した。



満州重工業開発本社
(日産自動車株式会社提供)

4 . 鮎川義介の絵画趣味

鮎川義介の趣味は、水墨画を描くことであつた。昭和 10 年 (1935) 発行の『サンデー毎日』のインタビューの中で、「10 万枚を念願にしているが、過去 5 年に 2 万枚しか描けていない。ほとんど毎日描いている」と言っている。義介は絵画の基本は と を描くことだと言ひ、正三角形を描きそれに内接する円を描く練習法を考案し、6 年間ひたすら と を描き続けたという。



鮎川義介揮毫鹿図
(株式会社損害保険ジャパン蔵)

・ 田村市郎と水産業の推進

田村市郎 慶応 2 年～昭和 26 年（1866～1951）



田村市郎
（日本水産株式会社提供）

久原庄三郎の 3 男として誕生、母方の田村家を継ぐ。明治 41 年（1908）国産初の鋼鉄製トロール漁船を建造、汽船トロール漁業の経営に乗り出した。明治 44 年には田村汽船漁業部を下関に設立、国司浩助らとトロール漁業を推進した。その後、共同漁業に改組、根拠地を戸畑に置いて事業を拡大していった。さらに日本捕鯨・日本合同工船・日本食料工業などを合併し、昭和 12 年（1937）日本水産を創設した。



計画当初の戸畑漁港
（日本水産株式会社提供）

・ 藤田伝三郎銅像建立と萩

明治 44 年（1911）南片河町の藤田伝三郎生誕地で、伝三郎銅像の除幕式が挙行された。萩で建立された最初の銅像であった。当日は萩の各町内から祭りのシャギリなどが繰り出し、萩の住民挙げて銅像の建立を祝った。生誕地は藤田家から当時の萩町に寄付され、伝三郎の雅号にちなんで香雪園と名づけられ公園として整備された。伝三郎がなした郷里萩への多額の寄付は、藤田慈恵基金として積み立てられ、教育・福祉事業に役立てられた。



藤田伝三郎銅像除幕式
（萩博物館蔵）

・久原房之助の萩帰郷

大正元年（1912）久原房之助は妻清子、母文子、兄斎藤幾太・田村市郎を伴い、まず汽船で須佐（現、萩市）に到着し、その後萩を訪れた。須佐・萩とも住民を招待した大園遊会を催し、自動車で小郡（現、山口市）を経て三田尻（現、防府市）へ向かった。萩へは阿武郡立実科高等女学校（現、萩高等学校）や萩商業学校（現、萩商工高等学校）の建設費など、須佐へは久原波止場の建設や奨学金などに、それぞれ多額の寄付をなした。



須佐滞在中の久原房之助一行
（山田洋子氏寄贈）

・鮎川義介と萩産業大博覧会

昭和10年（1935）萩市制3周年を記念し、萩の史跡観光振興と経済活性化を目的に萩産業大博覧会が開催された。日本産業社長鮎川義介は、博覧会実行委員会を組織、会場内に日産館を建設し、傘下会社の事業内容や製品などを出展し、日産コンツェルンの概要を紹介した。出展、協賛した会社は、日産自動車・日立製作所・日本鋳業（現、JX日鋳日石金属）・日本水産・中央火災傷害保険（現、損害保険ジャパン）など17社に上った。



日産館
（『萩史蹟産業博覧会日産館写真帖』）

年号は原則的に改元後のものに統一しました。（例・明治45年 大正元年）